

地域博物館の持続可能な管理運営のために

屋久島町立屋久杉自然館 学芸係長 松本 薫

1. 屋久島町立屋久杉自然館について

当館は、屋久町立の博物館として平成元年10月に開館。「屋久杉のすべてを知ることができる施設」として年間約5万人が訪れ、特徴ある観光拠点にもなっている。平成19年10月1日には上屋久町と屋久町が合併して屋久島町となり、島民のための施設としても新たなスタートを切った。自治体独自の発想による博物館として学芸事業にも力を注ぎ、その成果を出版物や特別展として発表するとともに、大学や研究機関とも連携を深めている。新聞や雑誌、テレビに屋久島の自然環境や屋久杉に関する情報を提供するなど、屋久島の情報を体系的に保有している屋久杉自然館は、平成8年、隣接して開設された国と県の施設にさきがけた施設として中核的役割をはたしてきた。高い文化性と能力が観光の核になり得るとの認識を持って、地域の博物館として屋久杉を軸に人と自然のかかわりを明らかにし、共生の島といわれる屋久島の価値を世に問うことを目指している。

しかしながら、当初は「人口6,000人の小さな町の財政力を大きく超える事業では」と問う声も多く、町民の冷やかな評価のもとでスタートをした。くしくも昭和40年代に建設された県内の多くの博物館も運営に苦慮しているケースを目の当たりにし、今後この施設が未来永劫に存続するためにはどうあるべきかという議論を重ね、次の3つを柱としてスタートを切った。

- ①博物館本来の機能の充実と地域博物館としての役割の確立
- ②観光施設として耐えうる施設づくり
- ③収支バランスを踏まえた管理運営

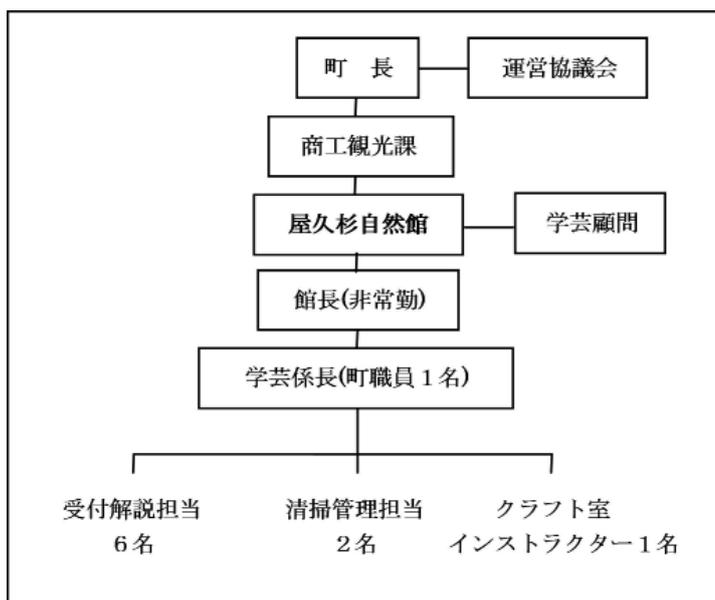


図1 屋久島町立屋久杉自然館 組織図

2. 地域博物館の持続可能な管理運営のための3つの柱

開館から23年を経過し、幸いにして入館者数は多少の増減を繰り返しながらも、ほぼ安定した数で推移し、収入アップを目的に推進してきたオリジナルグッズの販売も軌道に乗ってきた。この間、本町の財政は多くの市町村同様にかなり困窮し、予算編成の度に経費削減と無駄の排除が指示されてきたが、当館はどうか人員を削減することなく運営を続けてきた。

当館とは、運営形態、規模、取り巻く環境などそれぞれ異なり、他館の参考になるとは言い難いが、ここでは今後の当館の運営指針を再確認する意味も込めて、この3つの柱で取り組んだ具体的な事例を紹介する。

①博物館本来の機能と地域博物館としての役割の充実

ご存知のとおり、屋久島は30年ほど前から少しずつ注目され始め、観光客も増加傾向にあった。しかし、自然の豊かさだけが注目されており、歴史や民俗、産業そして自然と人とのかわりが軽んじられる傾向にあり、島民からはこの点を危惧する声が出始めていた。そのような中で24年前に開館した当館では、まず屋久島に関する資料の収集、整理に圧倒的な時間を費やした。同様の施設がなく、屋久島情報を集約する場所も機関も手薄であったことから、安定した博物館運営のためには博物館本来の機能の充実が不可欠であるとの判断からであった。また、オープン当初から“地域のテーマ”にこだわった一年単位の特別展を開催しており、それらは全て【資料収集・調査の実施→結果を特別展で公開】がベースとなっている。屋久島を訪れる多くの旅行者はもとより島内在住者も知らないことが数多くある、「そうだったのか」と納得して、気づいてほしい、そういう思いで特別展を開催した。今年度は、「屋久島誕生!!～屋久島のなりたちと地質～展」を開催している。当館が中心となり、地元の地質同好会をはじめ多くの関係者の協力を得ながら地球規模の壮大なスケールのテーマをまとめた。地元の研究者に協力を請うことで、新たに地域とのつながりを築くこともでき、ひいては当館をバックアップしてくれる応援団を得ることもできた。

また、開館からの最も大きな取り組みとしては、平成16年度から17年度にかけて実施した(独)科学技術振興機構の「地域科学館連携支援事業」がある。開館以来、日常の来

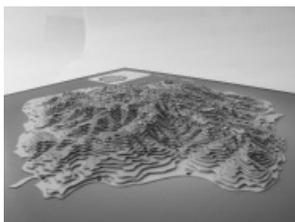


図3 屋久島地形模型



図2 出前授業

館者対応に追われ、地域博物館の最大の使命とも言える地域の学校との連携がほとんど取れていなかった。幸いにして、提案した事業案が採用され、「屋久島のことは僕たちが一番よく知っている」を大テーマに、初年度は『屋久島から学ぶー自然環境教育用の教材の制作と活用』①オリジナルスライド②鳥の目で見ると垂直分布キット③虫の目で見るとオリジナル屋久島標本BOX④宇宙の目で見ると屋久島地形模型キット⑤縄文杉実寸大パズル、フィールド活動に便利な方位磁石・ルーペ・岩石ハンマー・ワー



図4 屋久島なんでもリュックのツール

クシート等が入った⑥屋久島なんでもリュック、以上を制作し活用した。次年度は『飛び出そうフィールドへ！自然科学の体験教室～世界遺産の島・屋久島をフィールドとして～』を実施し、これらの教材を思う存分活用することができた。島内の小・中・高校、合わせて5校と活動を進め、出前授業が半年で22回に達した学校もあった。

また、客船を利用した修学旅行で屋久島を訪れた大阪の高校や東京からゼミで来島した大学とも連携し、屋久島の子供たちとの合同授業を実施した。当館から学芸員とスタッフが交代で出向き、屋久島の自然を知るための基礎学習や、地形を理解する地形模型づくり、植物観察会、水質検査、水の生き物観察などに取り組んだ。これらはその後の修学旅行の受け入れに大いに役立った。

また、授業を重ねるに従い、子どもたちや学校、保護者との人間関係も深まり、この成果をもっと広く紹介したいとの声があき上がり、成果展を開催することとなった。調べた内容をまとめ、当館スタッフの指導を受け、パネル貼りの作業まで児童生徒が担当した。「ぼくらの島は世界遺産」展と銘打ったこの成果展は、小さな町の小さな博物館にとっては、少ない人員を割き大変な業務になったが実りは大きなものであった。子どもたちはもちろん、学校や保護者に博物館としての機能や館自体を知ってもらおう大きなきっかけにもなった。

また他にも、「屋久杉巨樹・著名木」展、「屋久島やくすぎ物語」展、「小さな地球屋久島」展は、同名の書籍発行を記念しての特別展であった。学芸調査や情報収集の結果を特別展として展示する、あるいは書籍として出版することは、博物館本来の機能である「情報の収集、整理、発信」に他ならないが、後述する収支バランスとも関係してくる。

また当館は、町立ということもあり、町民は無料で入館できることになっており、島内の幼稚園、小学校などの遠足や介護施設のレクリエーション等にも利用されている。そういった地元利用者に、いつ来館しても何かしら違うものを見てもらえるよう、季節に沿った展示を心がけている。夏休みには子どもたちの自由研究の手助けになるような体験コーナーや学習展示を行っていてもいる。こうした動きが町民の入館者数アップにつながった。

一方で、博物館の大事な機能の一つである調査研究活動については、当館の規模では不可能であろうと当初から割り切り、単独で実施しないこととしてきた。鹿児島大学や九州大学、林野庁や環境省といった関係する機関との連携を図りながら取り組んでいる。

②観光施設として耐え得る博物館

「博物館が観光の核になりうる」との認識を常々言い続けてきた。平成元年オープンの当館は、屋久島が世界遺産に登録された平成5年には既に開館していた。地域による地域のための情報発信施設を自前で持っている、ということも世界遺産登録時に評価されたと聞き及んでいる。世界遺産に登録された後、マスコミからの情報提供の求めに応じ、テレビの出演や生中継、ラジオの生放送等にも対応してきた。「自然館に行けば屋久島や屋久杉のことがなんでもわかる」を目指し、情報提供している。また、来館者へはできる限りスタッフによる館内の案内を心掛

けている。スタッフの人数にも限りがあるので、すべての入館者には難しいが、少なくとも団体・グループには館内案内ができるよう徹底している。屋久島に観光にみえるお客様のニーズに応え、満足してもらえる博物館を目指している。館内案内は好評と見え、ツアー催行が決定すると旅行代理店から入館の連絡をいただけるようになった。また、年に3回ほど主要都市の旅行代理店を訪問し、集客活動に取り組み、エージェンツサイドからのニーズの把握にも努めている。



図5 ペン型音声ガイドシステム

しかし、団体ツアーでない個人旅行で、興味を持ってわざわざ足を運んでくださるお客様に、十分な案内ができないことに長年悩んでいた。それに対してようやく一つの光明が見えたのが平成22年度に導入した“ペン型音声ガイドシステム”だった。現在5本体制だが、入館者のニーズは高く、夏休みの家族連れにはフル回転で活躍してくれた。日本語の対応に続き、現在英語版の製作にかかっており、3月中の導入を目指している。

「目玉になる展示を持つ」ことも大きな課題の一つであったが、平成19年に展示を開始した『縄文杉いのちの枝』がこのことを払拭してくれた。屋久島の山間部は南国とは思えないほどの積雪がある。平成17年12月、積雪の重みで縄文杉の巨大な一本の枝が折れてしまった。すぐに林野庁、環境省、行政等に加えて有識者会による検討会が発足され、折れた枝の処遇について議論を重ねた。結果、現地より運び出し



図6 縄文杉「いのちの枝」案内風景

保存・展示を図ることが望ましい、保管場所として屋久杉自然館がふさわしい、ということになった。国有財産でもある縄文杉の、折れたとはいえ枝を預かることとなった次第であるが、「枝」といっても長さ5m弱、太いところで直径1m、重さ1tもある。展示場所をどうするか、どのように展示するか、展示にかかる2,000万円もの費用をどのように賄うか。またしても小さな博物館にとっては大きな試練であった。そこで、1年かけて枝の保存処理の傍ら、全国展開で募金活動を行うことになった。この折れ枝を「いのちの枝」と名付け、『縄文杉「いのちの枝」保存展示募金協力会』を発足させた。屋久町・上屋久町両町はもとより、鹿児島県議会、鹿児島県の経済界、新聞社等も巻き込み、大がかりな協力体制を構築できたことで募金活動は大成功をおさめた。屋久島・縄文杉というネームバリューのおかげもあり、住民はもちろん、大手企業や姉妹町からの寄付、鹿児島や東京での街頭募金も注目を集めた。また特筆すべきは私設応援団が独自に募金活動を展開し、まとまった金額をおくってくれたことであった。おかげで目標であった2,000万円を大きく超える額が集まり、約一年後の平成19年1月には無事、展示公開の運びとなった。



図7 募金活動

今年度は、島民に出演していただいているインフォメーショ

ンビデオのリニューアル、山の道具（山樵具）の使い方の記録・映像化に取り組んでおり、大詰めに迎えている。

③収支バランスを考えた管理運営

従来、「博物館は利益優先ではない」という考え方が根強いように感じている。特に公立の博物館はそのような傾向が見られ、運営の費用ねん出がままならず活気を失った博物館が県内でも多く見られる。

当館は、平成 22 年度でようやく自主財源比率 85%にたどり着いた。町立という立場上、管理運営費は町の財政状況に大きく左右されるが、そのことで衰退を招くというのではあまりにも悲しい。この 20 数年、自給自足を目指し、様々なことを試みてきた。年末年始の休館を取りやめ、ゴールデンウィークや夏休みには月に 1 度の休館日も臨時開館してきた。もちろん、ムダを省き、節約できるところはしているがそれにも限界がある。「楽しく管理運営する。コスト削減よりも収入アップ」を掲げ、人員は減らさずにここまで来られた。

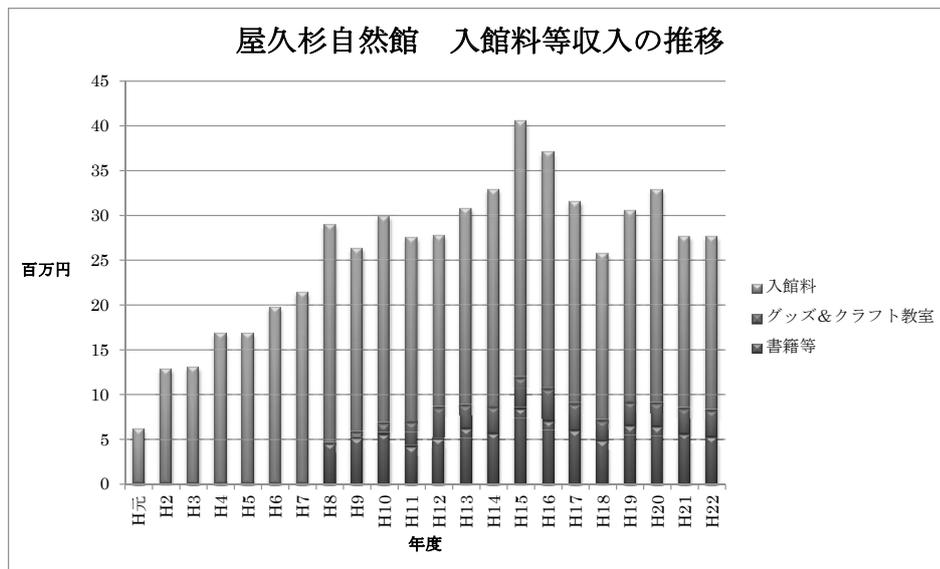


図 8 入館料等収入の推移

入館者数が増えれば入館料の収入アップになるが、それだけでは十分とは言えないと判断し、オリジナルミュージアムグッズの開発・販売によってさらなる収入のアップへとつなげている。ミュージアムショップの活性化はどの館でも力を入れている分野であろうが、書籍等の委託販売に頼るばかりでは、手数料収入だけで大幅な収入アップにはつながらない。オリジナルであることにその道が大きく広がる。前述のオリジナル書籍販売もそうだが、当館にはクラフト室があり、専門インストラクターを常駐させている。オリジナルクラフト製品の開発・製作、そして販売が可能となっている。当初はデザイン開発、屋久杉に頼らず屋久島の多様な樹種を扱うことからコストパフォーマンス等の面においてなかなか軌道に乗らなかった。しかし現在はある程度商品が定着したこともあり、1名による完全手作りながら品揃え、売り上げ等十分な戦力となっている。

またかねがね、書籍や木工製品以外の新たな商品として、観光客や帰省客がお土産として気軽に買えるお菓子類の開発を探っていた。食品衛生上の問題や賞味期限による在庫のリスク、屋久島らしい食材の採用など、様々なことをクリアしてきた結果、ようやく今年の8月から販売を開始することができた。

本事業の最大の目的は地元との連携であった。当館と地元屋久島高校家庭クラブの共同開発となったこのお菓子は、中心となった3人の担当者から1字ずつもらい南美香（なみか）と



図9 屋久島高校での試作



図10 完成したお菓子『南美香』

命名された。屋久島にある植物の葉っぱを象ったプレーン・塩・緑茶味の3種類のクッキーと、屋久島の特産品であるポンカン・タンカンの2種類のジャム、ジャムをすくう杉のスプーン、屋久島産紅茶がセットになっている。塩や卵、茶葉などクッキーの材料は地元産にこだわり、どうしても島内で手に入らない小麦粉などは屋久島町が交流を続けている姉妹町から調達した。ジャムや紅茶は地元の生産者をお願いすることで地域の活性化にも一役買っている。

3. まとめ

今まで持続可能な管理運営のために3つの柱をかかげ、1つの柱ごとに事例を挙げてきたが、それぞれ独立しているわけではなく、むしろ密接に関係していると言ってよい。1例で説明するならば、一昨年から取り組んでいる『あなたが選ぶ屋久島写真コンテスト』があげられる。一般から屋久島の写真を募集して館内に掲示、入館者ひとり1票で人気投票を行うというもので、応募者の中には、山岳ガイドやタクシー運転手など、地元からの出品が多かったこともあり、町民の入館者数アップにもつながる企画としても面白かった。その後、上位作品でカレンダーを作り販売したところ1ヶ月半で1,000部が完売し、売り上げアップにもつながった。この企画も好評を博し、2回目となる今年度は一層応募作品が増えた。来年度以降も続けることができそうな企画となっている。

屋久島の知的財産の一翼を担う当館の働きを枯渇化させないために、要は人を集めるために常に何か新しいことに取り組み続ける、その姿勢こそが大切なのではないかと考えている。情報をストックして次の世代に渡す、地域の役に立つ、収入アップを図る、この3つを実現していくことが、持続可能な管理運営の指標となるのではないだろうか。